

令和6年度 第1回足立区子ども計画審議会 会議概要

会 議 名	足立区子ども計画審議会 第1回		
事 務 局	政策経営部 子どもの貧困対策・若年者支援課		
開 催 年 月 日	令和6年8月27日（火）		
開 催 時 間	午後6時30分 ～ 午後8時30分		
開 催 場 所	足立区役所 中央館8階 庁議室		
出 席 者	【委員】		
	藤原 武男 会長	山田 哲也 委員	末富 芳 委員
	加藤 泰弘 委員	川上 重昭 委員	高木 政代 委員
	中山 勇魚 委員	小野 茜 委員	菊地 美穂 委員
	田中 優哉 委員	山崎 衛 委員	太田 せいいち 委員
	しぶや 竜一 委員	ぬかが 和子 委員	水野 あゆみ 委員
	中村 明慶 委員	長谷川 勝美 副会長	
	【事務局】		
	あだち未来支援室 伊東 室長	子どもの貧困対策 ・若年者支援課 濱田 課長	子どもの貧困対策係 今 係長
	子どもの貧困対策係 市川	子どもの貧困対策係 檜村	若年者支援推進担当 加美山 係長
若年者支援推進担当 済賀			
関 係 所 管	政策経営部 勝田 部長	福祉部 千ヶ崎 部長	衛生部 馬場 部長
	教育指導部 岩松 部長	こども支援センター げんき／こども家庭 相談室長 神保 所長	学校運営部 絵野沢 部長
	子ども家庭部 楠山 部長		
欠 席 者	阿部 彩 委員		

<p>会 議 次 第</p>	<p>～第一部～</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 足立区こども計画審議会委員委嘱 2 足立区こども計画審議会 会長・副会長選出 3 諮問 4 区長挨拶 <p>～第二部～</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 委員自己紹介 2 こども計画審議会の運営について 3 こども計画審議会のスケジュール 4 こども計画策定の趣旨と方向性 5 こども計画策定の検討素材 6 意見交換（区の現状・課題等） 7 事務連絡
<p>資 料</p>	<p>【資料 1】 足立区こども計画審議会に関する説明資料</p> <p>【資料 2】 足立区こども計画審議会条例</p> <p>【資料 3】 足立区こども計画審議会条例施行規則</p> <p>【資料 4】 足立区こども計画審議会委員名簿</p> <p>【資料 5】 こども大綱</p> <p>【資料 6】 「足立区子どもの貧困対策 第1回検討会議（全体会）」資料</p> <p>【資料 7】 足立区転出入者アンケート調査報告書（抜粋）</p> <p>【資料 8】 足立区令和4年度「出産・子育てアンケート」調査結果（抜粋）</p> <p>《参 考》足立区子どもの貧困対策実施計画（令和2年度～令和6年度）</p>

第1部

1. 足立区子ども計画審議会委員委嘱

○事務局

それでは定刻となりましたので始めさせていただきます。ただいまより第1回足立区子ども計画審議会を開催します。本日はお忙しいところお集まりいただき誠にありがとうございます。私は子どもの貧困対策・若年者支援課の濱田と申します。どうぞよろしく願いいたします。本日は第1部、第2部の構成となっておりますが、第1部の司会進行を務めさせていただきます。よろしく願いいたします。

本審議会は、足立区子ども計画審議会条例第8条により、会議を公開とさせていただいております。会議録についてもホームページなどで公開することをご了解願います。また本審議会については正確に記録するため、録音をさせていただいております。また、広報やホームページ等に掲載するため、写真撮影も行いますので、その点もご了承ください。

それでは、本日の次第に沿って進めさせていただきます。最初に委嘱式を行います。本来であれば委員の皆様お一人お一人に委嘱状をお渡しするところですが、本日は代表して審議会以最年少委員となる菊地委員に区長から委嘱状をお渡しします。なお代表以外の方は、席上に委嘱状を配付していますのでご了解願います。

それでは、近藤区長から菊地委員に委嘱状をお渡しします。菊地委員はその場でご起立願います。

○近藤区長

委嘱状。菊地美穂様。足立区子ども計画審議会委員を委嘱します。令和6年8月27日、足立区長、近藤やよい。どうぞよろしく願いいたします。

2. 足立区子ども計画審議会会長・副会長選出

○事務局

ありがとうございます。続きまして、本審議会の会長及び副会長の選出についてです。皆様のお手元にご覧いただけます資料2、足立区子ども計画審議会条例第5条では、審議会に会長及び副会長を置き、委員の互選によって定めるとしています。まず会長の選出から行います。いかががいたしましょうか。

○川上委員

事務局一任でどうでしょうか。

○事務局

ただいま事務局一任とのお声がありました。事務局としましては、足立区子どもの貧困対策実施計画の策定や、子どもの健康生活実態調査にご協力をちょうだいしている東京医科歯科大学大学院教授の藤原委員ではいかがでしょうか。

(異議なし)

○事務局

異議なしとのお声をいただきました。藤原委員、いかがでしょうか。

○藤原委員

ありがとうございます。頑張らせていただきます。

○事務局

ありがとうございます。続きまして、副会長の選出についてはいかがでしょうか。

○川上委員

同じく事務局一任。

○事務局

ありがとうございます。ただいま事務局一任とのお声がありました。副会長については、足

立区職員として政策経営部長等を歴任し、平成29年3月から副区長を務めております長谷川委員ではいかがでしょうか。

(異議なし)

○事務局

異議なしとのお声をいただきました。長谷川委員、いかがでしょうか。

○長谷川委員

どうぞよろしく申し上げます。

○事務局

ありがとうございます。それでは藤原会長、長谷川副会長、よろしく願いいたします。

3. 諮問

○事務局

続きまして、足立区長よりこども計画に関する諮問をいたします。近藤区長から藤原会長へ諮問書をお渡しします。藤原会長はその場で起立願います。

○近藤区長

諮問。足立区こども計画を作成するにあたり、下記の事項について諮問します。1、足立区こども計画について。どうぞよろしく願いいたします。

○藤原会長

よろしく願いいたします。

4. 区長挨拶

○事務局

ありがとうございました。それではこれから近藤区長からご挨拶をちょうだいしたいと思います。よろしく願いいたします。

○近藤区長

高いところから申し訳ありません。一言ご挨拶を申し上げます。お疲れのところをお集まりいただきまして誠にありがとうございます。本審議会、当事者の意見を聞くという国の流れもありまして、今ご紹介を申し上げた最年少の方が二十歳ということで、こうした会議ですと通常は一番最年長の方に諮問するというのもございますが、今日はあえて最年少の菊地さんに諮問させていただきました。若い方も、そしてまた年配の方も闊達なご意見を寄せていただきまして、意義のあるこども計画の取りまとめに大いに期待をさせていただきます。

今から振り返りますと、この令和6年度で足立区が子どもの貧困対策に力を入れてから10年という大きな節目の年を迎えることとなります。当初子どもの貧困対策担当ということで部署も立ち上げましたが、子どもの貧困対策という名前ではとても地域に入れないということで、総合事業調整担当という何をやるか分からないような名称も併記をして、そうしないとなかなか貧困という言葉が地域で発することができないようなまだ時勢でしたが、10年経って隔世の感がございます。足立区では10年間こちらの方面で、口幅ったい言い方で恐縮ですが、国をリードしてきたと。先駆的な取り組みを展開してきたという自負もございますので、今回もそうしたところを十二分に、そういった方面でも内容を継続するような形で、もちろん刷新していただくところは刷新していただきながらも、これまでの10年をベースにした更に今後も国をリードしていくような子どもの計画を作ってくださいませようによろしく願いいたします。

私からは期待を込めて、二つぜひお願いしたいことがございます。1点は自治体の名前を変えればどこでも通用するというような紋切り型の桃太郎的な計画ではなくて、足立区らしさを入れ込んだ、少々とんがったところがあるような計画。足立区のおいがプンプンするような、皆さん方の思いが伝わってくるような熱のある

計画をお願いしたいというのが一つ。やはり計画は作ってからがスタートになりますので、常に進捗管理ができる、PDCAサイクルが回るような内容でなければなりませんので、そのためにも論理的な成果指標と、それを支えるための活動指標をきちんと入れ込んで、作ったものが常に更に良いものに改善できるような中身のある計画にしていきたいと考えております。子どもまんなか社会ということが絵に描いた餅では終わらない。この計画があったからこそ、足立区の施策が更に進んで、今までなかなか支援が行き届かなかったところにも目配りが利く。これでまた足立の現場でお困りの方々が改善されるという計画にしていきたいと思っております。

もちろんすぐにできることと、中長期的なところはあるかもしれませんが、どんなに時間が掛かってもこれはやるべきだと。これはもっと迅速に進めるべきだということもありますので、もしどうしても早く進めるべきことがありましたら、計画がとりまとまるまで待つこともなく、必要なことは一番最短となれば令和7年度。来年の4月から始まる年度もありますので、皆様方にもその辺のところをお含み置きをいただきまして、ぜひスピード感を持って審議を進めていただければ大変ありがたいと考えております。お疲れの時間帯、まだまだこれから議論を尽くしていくわけですが、皆さん方の熱い思いに足立の子どもたちの未来が懸かっていますので、ぜひご協力のほどよろしくお願い申し上げます。少しでも皆さん方が話しやすい雰囲気。そしてまたいろいろヒアリングをしたり、現場を見てみたいというお話が出れば、私どももできる限りバックアップをさせていただきますので、ぜひそうしたご注文も寄せていただいて、実のある審議会となりますように、よろしくお願い申し上げます。今日はありがとうございます。

○事務局

近藤区長、ありがとうございます。それではこれにて第1部を終了します。なお近藤区長

はここで退席とさせていただきます。

○近藤区長

どうぞよろしく願いいたします。

○事務局

それでは藤原委員が会長に選任されましたので、席の移動をお願いいたします。

第2部

1. 委員自己紹介

○事務局

それでは、ここから第2部を始めます。改めて本日の配付資料を確認させていただきます。まず子ども計画審議会座席表です。それから子ども計画審議会の委員名簿です。こちらは以前お配りしているものから、お名前にふりがなを振っているものです。最後に足立区職員名簿となります。続きまして、事前にお配りしている資料の確認です。まず第1回足立区子ども計画審議会の次第です。次に資料1、子ども計画審議会の運営についてと記載された資料です。次に資料2、子ども計画審議会条例。資料3、足立区子ども計画審議会条例施行規則。資料4、足立区子ども計画審議会委員名簿。資料5、子ども大綱。資料6、足立区子どもの貧困対策第1回検討会議全体会資料。資料7、足立区転入者アンケート調査報告書（抜粋）。資料8、足立区令和4年度出産子育てアンケート調査結果（抜粋）。最後に参考資料として、第2期足立区子どもの貧困対策実施計画となります。資料は以上です。

続いて席上のマイクの使い方のご案内です。ご発言の際にはお手数ですが、お手元のマイクのボタンを押していただきたいと思います。マイクのランプが点灯しましたらご発言をお願いいたします。なお、このご発言の際は会議録作成に必要なため、最初にお名前をおっしゃっていただければと思います。ご発言が終わりましたら、再度ボタンを押していただきますようお願いいたします。

願います。それではここからは藤原会長に進行をお願いします。

○藤原会長

ありがとうございます。改めまして皆さん、どうもこんばんは。東京医科歯科大学で公衆衛生学という、コロナでようやく世の中に認知された学問ですが、言い換えると予防医学の研究をしております藤原武男と申します。今日は本当に夜遅い時間にこのようにお集まりいただきましてありがとうございます。特に公募委員の4名の若い皆様におかれましては本当にありがとうございます。緊張していますか、大丈夫ですか？ 私も緊張しているので、大丈夫です。こんな雰囲気では緊張してしまいますよね。今日の目的は、新しいこども家庭庁ができて、子どもの計画を各自治体で独自に作っていきこうというところで、大事な概念というか、キーワードというか、頭出しとしてこれは入れてほしいということを忌憚なく聞いていただいていると思っています。ぜひリラックスした感じでディスカッションができればと思っています。

最初ですので、簡単に自己紹介をしてから、資料の説明をしてもらって、フリートークをしていきたいと思います。先ほど申し上げましたように私は公衆衛生の研究をしているのですが、主に子どもの健康、発達に関する研究をしています。最初に子どもの虐待の予防研究をしていたのですが、そこから貧困の問題であるとか、社会のつながり、孤独・孤立がいかに良くないかといった社会疫学の研究をやってきました、ご縁があつて足立区の子どもの貧困対策、小中学校の方々への調査をさせていただいて、どうしたことで子どもたちが元気に生きていけるかということも研究もさせていただきました。今日皆さん方とざっくばらんに話ができることを本当に楽しみに来させていただきました。何卒よろしく願います。

それでは名簿順に、阿部彩委員は欠席ですので、オンラインですが末富委員から自己紹介をいただいてもよろしいでしょうか。

○末富委員

オンラインで失礼します。日本大学の末富と申します。私はこども家庭庁のこども家庭審議会で今子どもの貧困対策、一人親部会の委員として、内閣府時代から11年にわたって、日本の子ども・若者の貧困対策にかかわっています。もともとの専門は教育政策でして、例えばですが、今回のこども計画とかかわりでは、子どもの貧困、若者の貧困だけではなくて、不登校の子どもたち・若者たちの学びの保障ですとか、前の会議体から申し上げていたのは、特に若者政策が日本は非常に薄くて、若い人をどう応援していったらいいのだろうかということや、足立区からさらに日本にこうやっていこうよというふうにグイグイリードしていただきたいということを強く要望してきました。ですので、今日は若い委員の方たちのご参加も含めて、非常に意義のある審議会がスタートしたということで、大変楽しみにしています。どうぞよろしく願います。

○山田委員

山田と申します。一橋大学で教員をしています。私の専門は教育社会学です。社会の大きな変化が教育の世界にどう影響を与えたり、新しい課題を教育の世界に提示するのとかといったことであるとか。あるいは教育の世界を一つの小さな社会と捉えて、そこに独特の規範とか秩序はどうなっているのとかといったことを研究してきました。具体的には教育改革に関する研究。それから教育問題と呼ばれるいくつかの問題。学力問題であるとか、あるいは不登校の子どもや保護者が直面する困難とその対応。あるいは、最近子どもの貧困と教育というテーマにも関心を持っていて、公営住宅を対象にした子育てと教育の調査に協働でかかわっています。足立区とは子どもの貧困対策関連の会議等でこれまでもご一緒してきました。今回こういった機会をいただきまして、こども計画についても

関与できることになり、緊張もしていますし、皆さんと一緒になるべくより良い計画を構想していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

○加藤委員

皆さん、初めまして。都立青井高校校長の加藤と申します。青井高校、3年目で、その前は教育委員会で課長職をしておりました。更にその前は足立西高校の校長を3年ほど務めておりました。青井高校。足立区の皆さんにはある一定のイメージがあると思いますが、先ほど近藤区長からは現場が見たいということであれば尽力するという話もありました。都立高校の現状、青井高校で良ければいつでも歓迎しますので、見たいということであればいらしていただきたいと思います。高校の関係者は私だけということで、現場感覚でいろいろお話をさせていただければと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

○川上委員

皆さん、初めてお目に掛かります。足立区民生・児童委員協議会から推薦されて来ましたが、区長が先ほどずっとこちらを見ていたのが分かりました。一番年じゃないのかなと思って、その年寄りが菊地委員ですか、二十歳。うちの孫みたいなものと一緒にこういうお話ができる。すごく緊張していますので、一つお手柔らかにお願いしたいと思います。以上です。よろしくお願いいたします。

○高木委員

皆様こんばんは。私は足立区の教育委員会でソーシャルワークアドバイザーという仕事をしております。教育指導課というところに配属されました。これは今年度4月からなので、まだ本当に新しい職種ということで、他の自治体にもいないのではないかと思います。私は平成27年、2015年度から足立区の統括スクールソーシャルワーカーとして足立区の子ども

たちにいろいろかかわってまいりました。ちょうど3月まで丸9年ですね。統括スクールソーシャルワーカーとして、スクールソーシャルワーカー活用事業の立ち上げから始まりまして、この事業の基盤づくり。それから次のスクールソーシャルワーカーの人材育成にメインとしてかかわってきました。昨年まで足立区の大体半分ですね。小中学校が合わせて102校あるのですが、その中の50校の地域をそれぞれの担当がおりますので、そこを一緒に巡回をしたり、ソーシャルワーカーの悩みを聞いたりとか、そんな仕事をしてきました。そして、今年度の4月からソーシャルワークアドバイザーということで、スクールソーシャルワーカーという名前がだいぶ周知されてきたのですが、またちょっと分からないということで。私の仕事は公立の小中学校とか、あとは教育委員会にいる指導主事が抱えている課題の解決に向けて、そのお手伝いをするということですね。要は子どもたちとか、そのご家庭の支援ネットワークの構築をしたり、その後方支援をすること。それから、今足立区でも不登校未然防止事業というのが始まりましてですね。そこが円滑に進むように、今までのスクールソーシャルワーカーの経験を生かして、モデル校の巡回とか、足立区だとスモールステップルームと言われるのですが、その運営等をお手伝いをしています。こう説明してもよく分からないと思いますが、一言で言うと、子どもたちが地域で生活しやすくなるようにお手伝いをする福祉の専門職となっています。ソーシャルワーカーですので、社会福祉士とか精神保健福祉士といった資格を持って活動をしています。私は足立区の会計年度任用職員なので、私の後ろに偉い方たちがいて、とても今は背中が寒い感じなのですが。皆さんと同じようにとても緊張しています。話しやすいような雰囲気のできたらいいなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

○中山委員

NPO法人Chance For Allの代表

をやっている中山勇魚と申します。よろしくお願ひいたします。私たちの団体は、学童保育をもともとずっと運営してきて、困難家庭の子どもは無料で通えるような、保育料だけではなく、食事とかキャンプとか遠足とかも全て無料にして、子どもたちが家庭や育った環境で体験とか生育環境が左右されないようにということ活動してきました。ここ数年は更に幅を広げて、大学生のボランティアの皆さんと一緒に、この近くにもあるのですが、フリースペース付きの駄菓子屋を作って、子どもたちが登録なしで、親の意思とかに関係なく、子ども自身の意思で遊びに来られるような場所づくりをしたり。あとは国立大学と一緒に無料の遊び場を開催したり。あとは足立区の公園でただただ子どもと遊ぶと。キャッチフレーズはお金は取りません。責任も取りませんということで、ただただ子どもたちが大学生と遊ぶという事業をやっていたり。あとは被災地。今ですと能登ですが、子どもたちの居場所・遊び場が非常に少なくなっていますので、被災地に職員やボランティアが今行ってまして、被災地の子どもたちの居場所、遊び場づくりなどをやっています。1年間で延べ10万人ぐらいの子どもたちと単発のイベントなどを含めるとかかっています。ずっと足立区の子供たちとかかかってきて、僕たちが最初に見た子たちはもうすぐ大学生になるのですが、すごくたくさんの子たちとかかかってきているので、その子たちもそうですし、これから大きくなっていく子どもたちも含めて、みんな幸せに笑顔で暮らせるようになってほしいなと強く思っています。この審議会を通して、足立区がより良くなればなと期待しています。よろしくお願ひいたします。

○小野委員

初めまして。小野茜と申します。私は大阪で生まれて、その後インターナショナルスクールに6年間通った後東京に来て、その後ロンドンの大学院に行って、上海の大学院を経て、今国立大学法人東京大学の経営企画部国際戦略課で

職員をしています。子どもに関する経験としては、教員免許を持っているということと、あとはこの3年間未来子ども財団というところで、子どもの心に寄り添うという。ものをあげるのではなく、遊びに行き、信頼できる大人になるというような支援を3年間続けています。そこではかなり大変な状況にある子どもさんとかも見させていただいています。特に何ができるというわけではないなといつも無力さを感じて、もっともっと何かしなければという思いに日々駆られていたところでした。今回このような場に出席させていただきまして誠にありがとうございます。よろしくお願ひいたします。

○菊地委員

皆様初めまして。二十歳になってから最年少と言われるのもなかなかないので、何だかうれしいなという気持ちです。公募委員の菊地美穂です。私は今学習院大学の理学部生命科学科の3年生です。だから何か知識があるといった感じではないのですが、私自身4人兄弟の一番上の長女で、一番下の妹が今年5歳になるような小さな妹だったり、その間もちょっと離れていて、大学1年生と中学1年生のそれぞれ妹と弟がいるような形で。また私の母が都立高校の養護教諭をしているということで、結構いろいろな実際に大変なご家庭の話であったり、逆に楽しそうな話もいろいろうかがっています。また、母もシングルマザーで、家族になっているので、私の方からは知識と言うよりは、自分が経験して感じたことであったりとか、物心ついたあたりから中学まではずっと足立区に住んでいるので、足立区の小中学校で当時感じたことであったり、その頃の友達と今話して、改めて感じたことであったり、自分の経験を元に意見をさせていただけたらいいかなと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

○田中委員

皆様初めまして。田中優哉と申します。今はコンサルティング会社に勤務してまして、い

つもは新規事業の計画だったり、あとはボランティアとして、NPO法人のフローレンスさんと一緒に子どもの体験格差を解消するプラットフォームを作るご支援もしています。子どもに関しては、子どもとか教育は昔から好きなのですが、今ちょうど若者と言っても29歳なのですが、2歳半の子どもがおりまして。今足立区で子育てをしている関係で、こちらにも応募をさせていただきました。私は小さい頃から足立区で生まれ育っているのですが、周りの同期とかからは、なぜ足立区で子育てをするの？みたいなことを言われたりもするので、こういった何で？と言われたいような形で、子育てと言えば足立区みたいなのをもっともっとアピールできるような形で、私としても当事者としての意見をしっかりと反映していければと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

○山崎委員

皆さん初めまして。山崎衛と申します。私は高校の非常勤講師を4年間やった後に、東京都の公立中学校の専任教諭として6年間社会科の教員として勤務してきました。その後、心理職に移りまして、今公認心理士・認証発達心理士・特別支援教育士という資格を持ちながら、発達障がいのお子さん、不登校のお子さん、そういったご家庭を支援することを、教員の経験を生かしながら勤務しています。区内の小中学校の巡回相談も今させていただいております。そういった形で子どもとかかわる仕事をずっと続けてきて、今回応募をさせていただきました。実際に私自身も梅島商店街で育ちまして、成人した後、南花畑に、まだエクスプレスができる前の南花畑に移りまして。その後結婚して2年ほど他区に移ったのですが、やはり戻って来なくなったので、今度は江北の方に家を構えて戻ってきたんですね。おそらく年齢が私一番高いと思いますが、50年弱足立区で生活をしてきています。子育てをしている最中でもありますので、住民目線・区民目線。あとは心理職として様々なご家庭と接してきている目線を生かし

ながら、お話をさせていただければと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

○太田委員

皆さんこんばんは。区議会を代表しまして、今回委員の委嘱を受けました太田せいいちと申します。私自身も小学生の子どもを抱える子育て世代でもございます。また自分自身不妊治療も経験してきましたので、そうした角度から経験者としての意見と、それから議員活動をする中で子ども食堂の運営をお手伝いする機会もあるのですが、そういった中で本当に当事者の方から様々な相談をいただく機会もたくさんあります。今回の様々な審議にあたって、そういった皆様の声にしっかりと耳を傾けて、心を寄せて全力で頑張っていきたいと思いますのでよろしく願いいたします。

○しぶや委員

皆さんこんばんは。区議会議員のしぶや竜一と申します。学識経験者の皆様、そして区内の有識者の皆様、そして若い世代を含めた公募委員の皆様、区職員の皆様、そして議員の皆様と活発な議論をしていくのを非常に楽しみにしておりました。私自身も子育て世代の1人ということもありますが、何よりもこども大綱、こどもまんなか社会を目指すということで、皆様とともに活発な議論。子どもの宝のためにしっかりと皆様と、足立区が先進的な事例となるように、皆様と活発な議論をすることを楽しみにしています。どうぞよろしく願いいたします。

○ぬかが委員

どうもこんばんは。区議会議員のぬかが和子と申します。実は私自身も保育士出身の議員でして、実は意外といるようでいないんですね。そういう中であつたので、それこそ足立区で区長が子どもの貧困対策をやろうと言った時に本当にうれしくて、その分野の委員もずっと務めさせていただいていました。最近足立区は子どもの貧困対策を頑張っているのだけれども、

まさにこども基本法で、子どもがど真ん中において、そして子どもが本当に主役になれるような足立区になってほしいという思いで、全国でも若者会議とか、若者のまちサミットとか行われていて、そういうものに参加したり。それから、今年の春にはソウルに行って、ハジャセンターと言うのですが、本当に若い人たち。困難を抱えている方も多いのですが、あちらも学歴社会なのだけでも、そういう中で学歴だけではなくて、やりたいことを職業にまで昇華させるような、そういう誰もが行ける場所があるんですね。そういうところを正式な視察でも勉強したりしてきました。皆様のご意見をしっかりと学びながら、そして本当により良い計画になっていったらいいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○水野委員

区議会議員の水野あゆみです。よろしくお願いいたします。私も今中学2年生と高校1年生の子育て中の母親です。藤原先生の著書の子育てのエビデンスですね。もっと早く出会っていればなど、いろいろ失敗談もございます。今現在も悩みながら子育てをしている部分もございます。そういう中で来月の一般質問はですね。不登校支援策というところで、また障がい児の支援だとか、不登校の子どもたちの支援というところで、家庭への支援というところもまだまだ少ないなということで、まだ悩んでいる家庭にしっかりと支援が強化されるようにということで、訴えさせていただくところです。また、今日は国の子育て施策をリードする先生方と一緒に審議できるということで、本当に楽しみであります。どうぞよろしくお願いいたします。

○中村委員

教育長の中村です。どうぞよろしくお願いいたします。私が教育長になりましたのがこの4月からでして、現在学校とか保育の現場とか、いろいろなところに行きまして、現場での課題とか、素晴らしい点とか、そういったところを

自分の目で確かめている状況です。そういった意味では、足立区の今日行く現場には課題が多いのですが、子どもたちが課題を抱えながらも、学校だったり、学校でない場であったり、いろいろなところでそれぞれが自分を高めていけるような、そういった足立区であってほしいと思いますので。このこども計画は今までの計画よりも非常にスパンの広い、できれば未来を描くものになってほしいという思いで参加させていただいております。皆様からたくさんのご意見をいただきながら、私も同時に勉強しながら、意見を申し上げていきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

○長谷川副会長

副区長の長谷川です。どうぞよろしくお願いいたします。先ほど田中委員から、子どもの体験格差に取り組んでいらっしゃるというお話がありましたが、実は私は昨日魚沼市に行ってきました。魚沼は足立区との友好都市になって20年になるのですが、足立区の中学2年生約5,000人が、2泊で稲作体験ということで体験をさせていただいています。これももう2年生は全員行く形ですね。そもそもが魚沼とのきっかけが、昭和37年ぐらいから当時の小出町と足立区が子どもの交歓会をやっていました。毎年150人ぐらいのお子さんが足立区から行って、魚沼から来て、それぞれホームステイで受けていました。10周年記念の冊子が中央図書館にありまして、それを借りて読んだのですが。私も区内の出身なので、私の同級生の名簿もあるわけです。私の年代の名簿を見ると、私は行ってないのですが、確かに裕福な家庭のお子さんたちが皆さん行っていたわけです。非常に実感しました。あ、彼は地主の息子だ。彼はおせんべい屋の工場を持っているねみみたいな感じで、そこにすごい私は体験格差を感じました。で、今の子どもたち5,000人が毎年2泊で行っているという面では、非常に隔世の感があるなということで。もう一つ言うと、足立区は今5,000人の小学5年生を劇団四季に全て連れて

いく。その中で非常に私が印象的だったのは、不登校のお子さんも学校には行かないのだけど、劇団四季は見に行きたいということで、お母さんが車で連れて現地に来ると聞きまして、やはり体験格差については、ぜひこの会の中で議論していきたいと思います。先ほど末富先生から、足立区からグイグイ国をリードするようにという励ましの言葉をいただきましたが、ぜひ皆さんとより良い計画。国をリードするような計画ができればと思っていますのでどうぞよろしく願いいたします。

○藤原会長

では事務局職員の方々も自己紹介をお願いします。

○事務局

まずあだち未来支援室長の伊東です。

○伊東室長

事務局の伊東です。本審議会、1年間にわたる審議になりますので、お付き合いのほどよろしく願いいたします。

○事務局

子どもの貧困対策・若年者支援課長の濱田です。どうぞよろしく願いいたします。1年間に及ぶ長い期間ですが、皆様と一緒にいい計画を作りたいと思います。

この他事務局職員は、机上配付の足立区職員名簿に記載していますので、後ほどご覧ください。よろしく願いいたします。なお、本日は子ども施策に関する区の部長もオブザーバーとして出席しています。必要に応じて発言しますのでよろしく願いいたします。

また、本審議会の運営を委託しております事業者、地域計画連合の職員も同席しております。

2. こども計画審議会の運営について

3. こども計画審議会のスケジュール

4. こども計画策定の趣旨と方向性

5. こども計画の位置付け

6. こども計画策定の検討素材

○藤原会長

では本題に入っていきたいと思います。様々な資料があります。次第2から6に該当する資料の説明を事務局から一括してお願いできますでしょうか。

○事務局

事務局から次第2から意見交換の前まで一括してご説明します。資料1をご覧ください。こども計画審議会の運営について。審議会の委員については、事前にお配りしている資料4の通りですが、18名で審議について進めていただくこととなります。任期等については記載の通りです。また先ほど区長から諮問をしましたが、最後に審議会の意見をまとめて足立区長に答申を行っていただくこととなります。

続いて2ページをご覧ください。スケジュールについてです。現在、第3回までのスケジュールが確定しています。4回目以降については、決まりましたら改めてご連絡します。5回の審議会を経て区に答申をいただき、パブリックコメントを実施した上で、令和7年度中の計画策定の予定で進めてまいりたいと考えております。

続いて3ページをご覧ください。こども計画の体系図とともに、各回でご審議をいただく大まかな項目を記載しています。今回は第1回目、基本理念のキーワード出しとなります。委員の皆様には計画策定の上で欠かせないと考えていること等を、それぞれのお立場から自由にご発言いただきたいと思います。その中でいただいたご意見から、足立区こども計画の基本理念につながるキーワードを事務局で整理して、次回の審議会につなげていきたいと考えております。

続いて4ページをご覧ください。こども計画策定の背景についてです。まず国の方針ですが、令和5年4月にこども基本法が制定され、12月にこども大綱が閣議決定されています。各自

治体にはこども大綱を踏まえて、こども計画の策定が努力義務とされています。こども大綱のポイントについては、こどもまんなか社会実現のため、少子化対策、子ども・若者支援、子どもの貧困対策の三つの視点を計画に盛り込むこととされています。こどもまんなか社会実現のための基本的な方針として、下の方に六つ、国から示されている方針を示しています。

続いて5ページから8ページはただいまご説明した国の方針について詳細を掲載している資料です。5ページ目がこども基本法についての説明です。6ページ目がこども大綱についての説明。7ページ目がこども大綱が目指すこどもまんなか社会の説明。8ページが子ども施策に関する基本的な方針。先ほど六つの方針とお話をしたものが、詳細がこちらに記載されています。

続いて9ページをご覧ください。国の方向性を踏まえて、現在足立区の状況と方向性について示しています。国が求める三つの視点ですが、足立区においては子どもの貧困対策を他の自治体に先駆けて重点的に対応してきた経緯もございいますので、三つの視点の中の一番上に子どもの貧困対策を挙げています。それぞれの視点ごとの矢印の太さは、現在の区の取り組み具合を示したものとご理解をいただければと思います。まず子どもの貧困対策については、足立区では貧困の連鎖は区のボトルネック的課題の根底として、平成27年度から足立区子どもの貧困対策実施計画に基づいて、重点課題として取り組んできましたので、一番太い矢印で記載しています。続いて、子ども・若者育成支援については、令和2年から第2期子どもの貧困対策実施計画。本日参考資料として付けているものがございいます。そちらで新たに取り組むべき事業として位置付けて対応を開始して、令和5年度を若年者支援元年として、更に事業を拡充してまいりましたので、少し太めの矢印で記載しています。最後に少子化対策については、一部実施している施策がございいますが、まだまだ不足している部分も多い状況ですので、一番細い矢印

で表現しています。今後はこの三つの視点を足立区こども計画に盛り込んでまいります。なお、既存の足立区こども計画、子どもの貧困対策実施計画は、足立区こども計画に包含されることとなります。

続いて10ページをご覧ください。左上の図が、先ほど申し上げた区のボトルネック課題について示したものです。前にも触れましたが、足立区では子どもの貧困の連鎖をボトルネック的課題の根底と捉えています。足立区では貧困の連鎖を解消しないことには、それぞれの施策の効果も得にくいと考えていますので、区としては足立区こども計画においても、子どもの貧困対策に重点を置いた計画としたいと示しているのが右側の大きな図となります。ただ、こども計画で、明るい未来や夢を描けるような視点も重要だと考えておりますので、明るい要素についても同時に計画に盛り込んでいく必要があると考えております。

続いて11ページ以降。こちらはこども計画を検討していただく上での検討素材となっております。まず11ページから13ページが足立区子どもの貧困対策実施計画の振り返り。こちらを今回ご参加いただいている学識の先生方と、5月に振り返りを実施した内容となっております。子どもの貧困対策、子ども・若者育成支援の素材として考えています。

12ページにおいて、第2期子どもの貧困対策実施計画の振り返りの中で、本日ご出席の学識の先生にいただいたご意見。それから区の考えをまとめています。

続いて13ページでは、第2期子どもの貧困対策実施計画で新たに組み込んだ若者支援について記載した内容となります。こちら先の子どもの貧困対策の振り返りの時に、学識の先生から若者を支援することが少子化対策になるとご意見をちょうだいしています。資料6において、第2期子どもの貧困対策実施計画の詳細資料を付けていますので、必要に応じてご参照いただければと思います。

続いて14ページ、15ページは少子化対策

の素材です。14ページは令和4年に実施した転出入者のアンケート調査で見えてきたポイントをまとめています。こちらにつきましては、20代前半が転入超過、30代前半が転出超過となっている区の状況を踏まえましてアンケートを実施し、そのアンケートの結果として見えてきたポイントを示しています。若い世代については、利便性ですとか、家賃の価格帯が安いといった理由で足立区に転入してきているという実情。それから、子育て世帯については、自宅購入を契機に足立区から出ていくという現状が見えます。

続いて15ページでは、令和5年に実施した出産子育てアンケートで見えてきたポイントをまとめています。こちらにもいわゆる費用に関する要望であったり、あとは預け先の拡充ですとか、職場の理解・支援の希望といったところがポイントとして出てきていると考えています。それぞれ資料7と8に抜粋版を付けていますので、こちらにも必要に応じてご参照いただければと思います。

続いて16ページ、17ページについては、子ども・若者から直接いただいた意見について、資料として付けております。16ページ目については、こちらは現在策定中の足立区基本計画において、実際にどんなまちにしていきたいかという視点で、子どもたちからオンラインを通して意見をいただいたものを一括で掲載しています。こちらにも真ん中に記載があります通り、子どもたちの意見をまとめますと、こども大綱に記載してある通り、いわゆる権利の主体として見てほしいという、子どもたちが実際に考えていることが見て取れるかなと考えております。

続いて17ページ。こちらはアダチ若者会議ということで、若者の意見を聞くということで、先日8月4日に実施した内容をまとめています。例えば学びについてのご意見ですとか、居場所についてのご意見が多くいただいたものかなと考えています。あとは一部の方からも、実際に働いている将来の自分の像を描くために、どんな仕事があるかといったものが見えてこないと

いうご意見もありました。

最後に18ページです。こちらが先日の子どもの貧困対策実施計画の検討会議で、学識の先生からこども計画策定について、こども計画の基本理念につながるような考え方についてということでご意見をちょうだいしたものです。こちらが例えばより困難な人たちに手厚く応援していくとか、子どもの人権・人格を尊重するとか、あとはより厳しい人に目を向けていくスタンスが外せないといったご意見をいただきました。こちらを参考に、こども計画についてご意見をちょうだいできればと考えております。

7. 意見交換（区の現状・課題等）

○藤原会長

ありがとうございます。今説明がありましたように、基本理念につながるキーワードとなるような材料をここでいろいろと出していただきたいというのが今日の主な趣旨です。とはいえ、少子化対策から若者対策・貧困対策もあって、赤ちゃんから小中高、子育て世代まで幅広いのですが、どこでもいいので気になったところでどんどんご意見をいただくということでもよろしいでしょうか。特にせっかく来ていただいたので、公募委員の方に多くご発言をいただければと思います。いかがでしょうか。まずは山田先生に口火をお願いしたいと思います。

○山田委員

私、諸事情で5月に開催された貧困対策の検討会議に出席が叶わなかったのですが、今日の資料の18ページでしょうか。こども計画の基本的理念につながる考え方ということで、学識の方々のご意見が列記されていましたが、全体を見せていただいて、私もその時の会議には参加ができなかったのですが、すごく共感するところが多いなと思いました。先ほどの事務局の説明もありましたように、足立区は他の自治体に先駆けて、子どもの貧困対策を手厚く計画し、

実施してきた経緯がありますので、足立区らしいこども計画を立てる上でも、これまでの議論の積み重ねとか、それは大事にしたいなという気持ちがあります。そしてそれは、18ページの資料だと、エクイティですか。より困難な人たちを手厚く応援していくとか、より厳しい層に目を向けていくスタンスを大事にしたいなと私自身も共感したところなんです。もちろん全ての子どもを大事にしますし、先ほど藤原先生がおっしゃったように、生まれたばかりの子どもから、若者まで幅広くサポートしていくことが大事なのですが。生まれて若者になって社会に参加していくプロセスを考えていくと、いろいろな事情で困難な状況に陥ったり、厳しい環境の中で試行錯誤を模索するような状態になり得るというのは、どの子どももあり得ることだと思うんですね。ですから、困難な人に手厚く応援するという事は、全ての子どもを大事にすることと両立しますし、そのベースになるような考え方なのかなと私自身も考えた次第です。

それと同時に、そういうエクイティとか厳しい層を応援するという時に、公募委員の皆さんのように実際に当事者であったり、子どもを育てながら足立で過ごしている方から見て、まだ抽象度の高い理念の言葉に、もう少し具体的なキーワードを与えていくとどういうふうになっていくのかということ、これはより当事者性が強い立場にある人たちならではの血の通った言葉とか、そういうものがあると思いますので、それをちょっと聞いてみたいなという気持ちもあります。

○藤原会長

子どもの貧困からの流れで、我々の意見も18ページに書かれているのですが、私はこの真ん中の人権とか人格の尊重というところにコメントをしているのですが、やはり歴史を紐解くと、国の子どもの政策というのが、戦時中は要するに兵力になる人をいかに育てるかということで政策があったわけですね。世界に名だたる母子手帳は、実はいかに元気な赤ちゃんを産ん

で、戦争に行かせるかということのために作られているんですね。そして産後の肥立ちを良くするために母子手帳をもらったお母さんにお餅をあげたり、さらしをあげたりとしているのが、今のおむつの配布につながっています。今はその意図はありませんが、その後にはいかに世界で競争に勝っていくのかということで、いわば社会のために教育、あるいは子ども政策があったと考えられます。そのような教育のあり方が今や行き詰まって、逆転させなければいけないと感じています。「社会のための子ども」、ではなく、「子どものための社会」を作ることになるかと思えます。それではそれって何なのかということ、いろいろな言っているのがこども大綱だと私は理解しています。

割と抽象的なので、それをどう現場の皆さんが、じゃあ自分たちのための社会って何だろうということ、ご意見をいただけるといいかなと思いますので、その視点で意見が出ると非常にいい計画ができるのではないかと個人的には思っています。

○田中委員

自治体とかが決めるこういう計画はトップダウン的になりがちだと思っています。今の学識からの意見はその通りだと思う一方で、厳しい層に対して何かをしていくのは、結局自治体とかからだと経済的な援助とかそういったことしかできないのではないかと思います。その中で我々は今住民の側から参加をしています、住民参加みたいなのがこども計画の中に入ってもいいのではないかと思います。例えば、先ほどNPOの中山さんからもありましたが、実際に民間の側からそういった場を提供して、別に自治体が場を用意するとかでもなく、民間の中でそういったコミュニティづくりみたいなことがもう少し進むと、財源が限られている中でも住民同士のつながりの中で子育てができていくみたいな、そういった相互に助け合っていく社会みたいな。いろいろこういった計画の中にも地域社会の実現とか、そういった文言が入

っていると思いますが、そうしたところがもう少し具体性を持ってそういった場があると、例えば我々もそうだと思いますが、今小さい子どもがいる中で、例えば夜にワンオペする時に一緒に子育てとかできたら楽だろうなと思ったりするのですが、なかなかそういった場はないと思っていて。うちは2人親なので、しっかりと2人で見ることができますが、一人親で夜その場に行くにご飯が出てきたり。それだけではなく、一緒に子育てができる場があると、それだけでも子育てをしやすい環境、場づくりができていくのではないかと考えています。

○菊地委員

私が先ほどの18ページを見て一番感じたのが、子どもの人権・人格を尊重するということ、これ私自身が感じたことになるのですが、自分が認められている時っていつなんだろうって考えた時に、周りの大人が褒めてくれるということであったり、自分とかかわる友達・先輩とかも含めて、自分とかかわっている人が自分のことを認めてくれると感じた瞬間が、やっぱり自分自身も認められていると。自分自身を尊重してもいいのだと感じるきっかけでもあったので。結局周りの大人というのは、皆さんもそうですし、私もこれからなっていくと考えた時に、その足立区に住む子どもたちもそうだけど、足立区を作り出す大人がみんな一致団結して、そういう子どもたちのためにもそうですし、自分たちのためにも、自分たちの将来のためにも、認めてあげられるような環境づくりであったり、言動・行動をしていくことが一番大切なのかなと考えていて。私が今回この委員を志望した時に書いた言葉が、夢への後押しをすることが大切なのではないかと書かせていただいて。この資料の17ページで、高校生の話し合いのところでも、夢について触れられていて、私も大学生だけど、同じように感じているのだなと思っていて。自分の夢が見つからないとか、自分の夢が決まっていなくてとか、とにかく生活することを目標に就職活動をしている友

達もいるので、そういった自分の夢を持つ、自分の目標があるということは、結局自分の心も豊かにしてくれるし。自分の目標への気持ちも、モチベーションも上がって行って、それが周りにも浸透して行って、長い目で見たら足立区全体が自分たちの夢を追うような気持ちを後押しをしてくれる。子どもを中心にやっている区になるのではないかと思います。

○藤原会長

本当にそうなのですが、一方で16ページ大人に伝えたいこととして、将来の夢を無理矢理考えさせるのをやめてほしいという意見もあるのですが、それについてはどう思いますか。

○菊地委員

私もそうだなと思ってしまっ。小学4年生ぐらいのタイミングで、2分の1成人式というのがあって、その時にみんなの前で将来の夢を話さないといけないことがあって。みんな本当にとりあえずケーキ屋さんとか適当に考えたこともありましたし。それが結局自分が本当に楽しいと思っていることを仕事にしたいと考えている子が結構多くいる中で、その可能性を増やしてあげるような。それこそキッザニアみたいなものがあるといいという意見には私も賛同しています。職場体験というのは、私も中学の頃にあったのですが、それも一つの職業だし。自分がやりたいものとも限らない。とりあえず行けと言われたから行ったみたいな形になっている子も多くいたので、そういういろいろな職業が世の中にはあって、こういうことができるということを、本当にそれこそ小中学生の子たちに選ばせてあげるといような形にするのがいいし。それだったら自分で選んだと思えるからこそ、決められていると感じないのではないかと思います。

○藤原会長

やはり選べるとか、主体性が尊重されているとか、内発的に自分でやりたいことが出てくる

ような環境とかがってということがキーワードとして挙がってきたのかなと思います。

○小野委員

まず今の件についてつながる部分なのですが、私最初にこの策定方針の三つに関して、子どもの貧困対策を重視した方がいいのではないかと考えています。今後少子化社会対策を盛り込むべきだと、それを統合してやっていくとなっていますが、やはりそこは私個人としては重視しなくてもいいのではないかと考えていて、面接の時も話をしました。というのも、ここに中途退学者が生活保護世帯だと倍だったとか、朝ご飯の接種率が20%低い生活保護世帯だったとか、高校卒業時に定職に就いていない率が8%に対して、生活保護世帯だと27%。やはり困難な世帯で育った子どもたちというのが、とても苦しい状況にあるというのはあると思います。

夢を支援するのはすごくすてきなことです。私が児童養護施設でボランティアをしている時に、子どもたちに夢を持ってもらいたいと思って支援に行こうとしたところで、結構断られることがありました。これは足立区にはクリスマス・ヴィレッジとかもあると思いますが、断られるということがあって。一つエピソードなのですが、弁護士の方だったり、スチュワーデスがCSRの関係で自分の職業に夢を持ってもらおうという感じで行こうとして、キラキラした職業の話をされたというところで、児童養護施設内で育った子どもたちで夢がと言うよりは、現実にもう就職するしかないとなった子どもがキラキラした世界を見て、それを壊すことになると。そうやって本当にその状況にある子どもが届きにくいような夢を見せることで、その後すごく施設の職員が困ったようなんですね。それを否定するわけにもいかないし、それを目指すことを支援すること。18歳から誰も後ろ盾がいなくなるという状況に対して、本当にそれがいい支援なのかとなったことがあります。

なので、夢を聞かないでほしいというのは普

通にもあると思うのですが、現実的な支援をもっと拡充しないとならないと思います。そこでキーワードに関係するのですが、そういう方たち。生活保護世帯であっても、その情報にアクセスしにくかったり、情報が届かない。無料の塾もあると思いますが、利用者が目的に達していないみたいなデータも拝見したのですが。足立区は今あるものはとても素晴らしいと思います。なので、そういう人たちに届く、本当に届けることを一番重視して、恥ずかしくないということ伝えることに重点を置いてはどうかと思います。

○藤原会長

重要なポイントだと思います。私もこのデータを解析していく中で、貧困というのをどう定義するかもいろいろあるのですが、年収だったり、支払が困難だったりとか、ライフラインが止められたりというので見ていくと、今までの足立の貧困対策で下がってきてはいるのですが、やはり一定層は確実に残ってしまっていて、その方々の子どもの健康への影響はもちろんですし、メンタルの影響がわかっています。一番最近増えている不登校の要因も、その未解決の貧困にありそうだなというのが分かっています。ボトルネックとして貧困問題に取り組むべきだろうというのは、その通りだなと思います。

現実的な支援というの、すごくいいキーワードだなと思いました。両方ですよね。夢を持っていくということと、現実的なということと二つがあると、非常に子どもとしてもどちらにも行けるという意味でも、可能性も逆に広がるのかなと聞いていて思いました。

○山崎委員

今のお三方のお話をうかがっていて、その流れでお話をさせていただくとすると、今夢というのが一つキーワードとして出てきていたかと思うのですが。コロナ禍で職場体験ができなくなって、仕事に子どもたちが触れ合う機会が減ってきてしまっているのかなというのは、少し危

惧をしているんですね。ただ、その中で将来の夢を結構民間で調査とかしますが、このコロナ禍で会社員というのが上の方に上がってきている。なぜか分析を見ると、コロナで本当に外に出られなくなった時に、家で働いている親の姿を見て、会社員っていうものに対するイメージがはっきり湧いてきていると思うんですね。そういった意味でも、子どもに本当にいろいろな仕事を直接見せてあげる機会というのは、本当にいろいろな進路選択を取る上で、とても大事なのではないかなというのを、今お三方の話をうかがっていて感じました。

あともう一つ、子どもの人権・人格を尊重するという観点のお話も出ていたかと思いますが、誰が尊重するのかというお話も今出ていたと思うのですが、子どもの子育て、本当に切れ目なくその子に支援をし続けるのは、家庭や保護者なんですよね。ですので、やはり保護者支援というのも、すごく大事ななと思うんですね。ちょっと心理的に言うと、保護者が不安な顔をしていたら、子どもの情緒は乱れますし。保護者がフワッとその中でも笑顔を見せると、子どももフワッと安心感が持てますし。大人の笑顔子ども笑顔につなげるような家庭環境、政策を採っていくといいのかなと思います。

観点が変わりますが、保護者のご相談を普段聞いていますと、かなり不安が強い。どんな不安が強いのか。大抵が見通しが立たないこと不安なんですね。参考資料の第2期子どもの貧困対策実施計画を全部拝見したのですが、子どもの不安に寄り添いというのが一言目に出ているのは発達支援のところだけなんですね。保護者の不安に寄り添うというのを、もっと他のところでもできないだろうか。それが保護者の安定。安定している保護者を見れば子どもも安心する。そういう好循環を生んでいきたいというのが、この子どもの人権・人格尊重というところで私は思いました。

発達障がいだと言われた。特別支援学校に行くのか、学級に行くのか。将来就労できるのだろうかという不安。不登校のご家庭もそうです

よね。この子の勉強をどうしていったらいいのだろう。どういう手立てがあるのだろうという不安がやはりあります。高校を中退される方の相談も結構受けるのですが、中退した後の選択肢をほとんどご存じないんですね。ですから、余計に不安になってしまっている。中退した後に何らかの手立てを踏んで、大学に上がっていくお子さんも結構いらっしゃるわけです。そういった見通しの立たない不安というのを、保護者の方はかなり感じていますので。子どもを尊重すること、イコール保護者をしっかり支えていく。不安に寄り添う。支援を行き届かせないといけないと思うんですね。ですが、保護者の中には私経験上あるのですが、学校をプラットフォームにして支援をすることがすごく大事だと思うのですが、学校の先生から電話が来ただけで構えたり、電話に出ないというご家庭もあるわけです。心理的な障壁。もしかしたら保護者自身も学校にいい思いをしてこなかったのかもしれないし。あるいは、忙しくて電話に出られないのかもしれないし。そういったところに対して、やはりプッシュ型とかアウトリーチとか、積極的に働き掛けて支援をしてあげる。そういったあたりが必要なのかなと思いました。

○藤原会長

私、東日本大震災の被災した子どもたちの調査をやったのですが、保護者のメンタルヘルスが一番の子どものPTSDや鬱の要因だったんですね。そこに地域の学校のソーシャルワーカーがいかにか保護者までケアするかということをやっている、その辺もヒントになるかなというのを今お話を聞いていて思いました。あとは先ほどの小野委員の話で、情報をいかに伝えるのか。どの程度の情報格差があるのか分かりませんが、明らかに知っている人と知らない人がいますよね。これなぜ解消されないのかをきちんと分析して、全員に伝わるようにしていく。その上で選ぶということがあると、今皆さんに言っていただいたことが動いていくような感じがするなと聞いていて思いました。

○加藤委員

学校という話が出てきたのでお話をさせていただきます。夢の後押しってすごくいい言葉だなと思いました。キーワードになると思います。足立区内にある都立学校ですが、高校は9校あります。都立学校という意味では、特別支援学校が2校。全部で11校あるんですね。ただ、都立なので、足立区という土地にあるだけで、区が特に何か支援をするといったことは基本的にはないのですが、足立区からは本当にいろいろと手を差し伸べていただいて、何年も前から中学と高校の接続が大事だと言って、中高接続会議といった組織を作って、情報交換や情報共有をしているところです。おそらく区としても、小中学生までは様々な支援はしているのだけれども、高校生になると都立、私立となるので、なかなか区の支援が届かないということで、そこを課題にして出た施策が、資料の13ページにある高校生・大学生の様々な支援かと思います。これについては、区からも本校に直接おいていただいて、直接説明を受けたり、教員向けの説明をしていました。その背景には、区内の都立高校・都立学校のほとんどが、足立区の子どもたちを受け入れているんですね。本校の場合、75%ぐらいが足立区民です。そういった背景があるので、非常に高校生世代としても、ぜひそこは支援の手を差し伸べてほしいという思いは大きいです。

ただ、こういった形で議論を重ねて、こども計画が策定されました。ではそれを一体何人の子どもが読むだろうか。子どもはあまり読まないと思うのですが、その内容についてどれだけの方々が詳しく知ろうとするのかということがあると思うんです。区としても様々な支援策を出していますが、本校の中退率は下がる傾向にはありますが、決して少ないとは言えない状況なんですね。本校は相談体制が充実していて、ユースソーシャルワーカーだとかスクールカウンセラーが複数配置されている学校なのですが、そこでこういった支援の手があると案内しても、

ではそれに応じて子どもたちがすぐにそこを頼るかということ、決してそうではないという現状があります。

生徒たちも18歳になれば成人ですが、どうすれば助けてもらえるのかが分からない。自分が支援の対象なのかも分からない。そもそも支援の何たるかが理解できていない。これは保護者もそうです。その支援のための情報収集ができない。収集の方法が分からない。収集するという考えに至らないというような現状があります。また、外国にルーツのある方々は、特に保護者がそうなのですが、日本語が不得手でコミュニケーションに非常に消極的という現状もあります。また、いろいろ問題を起こすと児童相談所案件ということになって、そうすると今度は戻ってきた時に支援が切れるということもあるんですね。様々な施策を考えて出てくると思いますが、それが何歳であっても、どこにいてもすぐに支援の手が届く体制づくりというのが非常に重要だと思います。何も知らなくても、こういう方法が、支援があるのだということが分かるようなそういう体制づくりが何よりも大切だと考えています。もちろん多くの生徒はそんなことはない。多くの保護者はきちんと考えているのですが、他方それが少数であっても、非常に困っているという現状がありますので、それはぜひ共有させていただきたいと思います。

○中山委員

主に小学生の視点で発言をさせていただくと、子どもたちが自分自身で過ごし方を選択できるようになってほしいなというのをすごく考えています。私今39歳ですが、30年前と比べて学校自体はそんなに変わっていない。むしろ良くなっていると思います。私が子どもの頃って普通にぶん殴られたりしていたので、それに比べてだいぶ学校は良くなっていると思うのですが。一方で不登校が増えたり、苦しんでいる子が増えている。子どもがこれだけ減っているのに、苦しんでいる子が増えているというのは、私としては放課後の過ごし方が大きく変わって

いるのではないかと考えています。少し前までは子どもたちも、自分が放課後をどう過ごすか。チャイムが鳴ったらバーンと学校から飛び出て、今日はこれしよう、あれしようと思っただけで、今日はこれしよう、あれしようと思っただけで、多くの子が学童保育に通っていたり、発達障がいのある子は放課後デイに行く。貧困家庭の子は区の委託を受けた施設に行くということで、子どもの意思が介在せず、行く場所が決まっているし、過ごし方も決まってしまう。それがすごくしんどいなと思っただけで。

例えば我々が運営している居場所、フリースペースに来る子の中で、自転車で1時間以上掛けてくる子がいて。なぜこんな遠くまで来るの？って言うと、私はスクールカーストが低いのだと。だから、教室の中でも発言ができない。めちゃくちゃおしゃべりな子だけでも、発言ができない子で。強い子たちが発言するから、ずっと黙っているのだと。だから、私のことを誰も知らない場所に行きたいというので来ているんですね。それって一つすごく大事だと思っただけで。一方で場所を選べないと、学校の中でクラスでうまく行っていない子が、放課後もお父さん・お母さんが働いているから、学校の中の学童に行く。行かなければならないとなると、同じ関係性を引きずってずっとつらいまま過ごさないといけない。これが自由にいろいろな場所が区内にあって、子どもたちが通える場所があれば、私はここで気が合うからここにいたいというか。あの人と気が合わないから離れたいということが選べると思うのですが、その選択肢がほとんどないというのが、すごく子どもたちを苦しめているなと思っただけで。

子どもの意見でも、自由に遊べないとか、子どもがいろいろ決められるようにしてほしいといったものがありますが、まさに人権という意味でも、子どもが選択できる場所は必要ではないかと思っただけで。そう考えた時に、先ほど田中委員の話でも、もっと区民とか地元の人たちの活動を後押ししてもいいのではないかというお話があったと思うのですが、学習支援がで

きる居場所。貧困家庭向けの居場所。先ほどデータも拝見しましたが、来ている子どもが300人ぐらいで数億円の予算が掛かっていると。これは大事なことだとは思っていますが、全ての子どもが居場所を選ぶ時に、それだけのお金を掛けていると、なかなかそれだけは作れない。何百億、何千億ということになってしまいますので。そう考えた時に、例えば大学生とか地元の人たちが、少しずつあまりお金を掛けずに、自分たちの生活を自分たちで作っていくという、そういう活動だったりとか、ボランティアな活動をどんどん区として後押しをしていって、子どもたちが今日はあそこに行こうかなとか、あそこで遊ぼうかなと選べるようにしていきたいなと思っただけで。

もう一つ、先ほど山崎委員からあった通り、保護者の方が本当につらそうにしている、特に小学生になると、保育園までは子育て支援施設なので、お迎えに行くと保育園の先生がいろいろ話してくれたり、相談に乗ってくれるのだけれど、小学校になるとどうしても学校から電話が掛かってくると問題を起こしたとか、けんかしたとかっていう話になって、どんどん電話を取るのがつらくなってしまふ。面談もすごく憂鬱だみたいな保護者が多くて、我々も学童で保護者面談をした時に、お母さん、すごく頑張っていますよ。全然大丈夫ですよ、と言うだけでも号泣しちゃうような保護者もたくさんいて。初めて褒められた気がするみたいな、そういう方もたくさんいるので。もうちょっと保護者の方が気楽にいろいろな方とおしゃべりできたりとか、子育ての責任を全て家庭に押し付けるみたいな状態になっているなと思うので、もうちょっと地域みんなで子どもの育ちを見守るような足立区になるといいのではないかなと思っただけで。

○山崎委員

今中山委員からお話がありましたが、学童に通っている子について、先ほどスクールカーストという言葉もありましたが、学校の関係性を

引きずって、学童に行くのがつらいと言うお子さんはやはりいらっしゃいます。そういった中で話を聞いていくと、学童の中でいろいろな配慮をしてくださったり、楽しい思いもあるはずなのですが。やはりちょっときついというお子さんがいて。学童に行きたくないと言うと、保護者はじゃあどうしようとなる不安がそこで連鎖で出てしまうとか、そういったところはあるのかなと思うのと。やはり学校から電話が掛かってきただけでビクッとしてしまうというところで、お母さん、これで大丈夫ですよとか、あるいは、お母さん、今ここまでできているから、お子さんはこれだけ笑顔があるんですよ、って伝えてあげるだけでバーッと涙を流される保護者の方もいてですね。

そうすると、例えば一つ学校ってどうしてもプラットフォームになる場所だとは思いますが、指導する場所というのももちろん大事なのですが、保護者の不安に伴走者のような形で一緒に寄り添って、一緒に子どもを育てていくというような観点があった方が、保護者の方はもっと安心して子育てができるのではないかなと思いました。

○藤原会長

保護者の支援・伴走をする人というのは、どういう人が想定されるのでしょうか。

○山崎委員

今の私の話ですと、学校の先生も指導という観点よりは、保護者の方と一緒にお子さんに向き合っていきましょうというのが、先生方ももちろんそうですし。いろいろ困難なご家庭もありますから、スクールソーシャルワーカーの方とか、スクールカウンセラーの方とか、あるいは区の相談窓口もありますよね。本当に困っている人が相談に行くかというのは置いておいたとしても、相談窓口はどこに相談に行ったらいいのかなというのが分かりやすくなっているのがいいのかなと思うんですね。足立区、子育て、相談って調べてると、いっぱいいろいろな窓口が

出てくると思うのですが、どこにまず行ったらいいのかなとか、そうした時に導入としては学校のカウンセラーの先生とか、そういったところもあると思うのですが、いろいろな伴走者が考えられると思います。ただ、学校はお子さんの生活の基軸になるならば、やはり先生方にまずは保護者の方の伴走者になってほしいなと思っています。

○高木委員

山崎さんからスクールソーシャルワーカーへの期待ということで、熱いまなざしを感じたのですが。私たち、ソーシャルワーカーは児童福祉とか、子どもの支援と言っていますが、やはり現場は保護者支援の方が圧倒的に多いです。やはり子どもは親の影響を受けて、家庭の何か課題があるとしたら、それをそのまま引きずって、自分の教室に来るということで。子どもによっては学校でちょっと、あれ？大丈夫？っていう感じの子もいれば、お家でそういう形になって、学校でおとなしいのに、という子もいて。何らかの信号を子どもたちは出してくれているんですね。それをいかに周囲の大人が見つかるというか。それは寄り添うと言うのか。寄り添うってとても難しいなと本当に思います。子どもはやはり言語化ができないので、うまく自分のことを表現することができない。その代わりに行動に起こしたりというところがありますから、毎日子どもを見てくれている人。やはり家庭であったり、学校であったり、ちょっとした気付きというか、そこがすごく大事だなと思うんですね。

先ほど学校プラットフォームということがありましたし、学校から電話があるとやはり構えます。私も子育てをしまして、今20代になるのですが、自分にとっては若者がいるのですが。私ごとですが、うちは転勤族だったんです。子どもが小さい時、小学校を三つぐらい替わっていて。よく不登校にならなかったななんて、いつもドキドキしながら子育てをしてきましたので、子どもの年齢、発達段階によってその時の

環境の受け止め方が全然違います。小さい時はまだよく自分のことが分かっていないので、自分中心の世界で生きているうちは、まだそんなに人の意見とかも分からないし、これが思春期に入ってくると、もう引越しは絶対に嫌だということで、非常につらい思いもしながら、逆にそういう思いをしたので、どんなところでも結構うまくやっていけるようなそういった技術を身に付けたりとか。メリット・デメリットあるなと思いました。

皆さんからのいろいろなお考えとか議論を出していただいたので、夢と現実とか、夢の後押し。それから実際に子どもを育てやすいかとか。そして子どもだけではなくて、やはり大人がいかに生きやすいかというところが全部つながっているなど。トータルして一つの人生みたいな、それがみんなが幸せになることなのかなと思いましたので、私は個人的に知らない土地に行くところ行くところで、旅行とは全然違います。生活をするというのは、本当にシビアだなと思っていて。私は幸いなことに、行くところ行くところで地域の人に助けてもらったなという思いがたくさんあって。近所の方がちょっと子育てを一緒にやってくれたりとか。例えば子どもが外に行って遊んで帰ってくると、お菓子を手に持っていたりとか。そういう地域の人とのつながりというのがとても大事だったなというのを、今まで自分が生きてきた中でも感じていて。困っていることが言える場所、言える環境というのがとても大事なのではないかと思います。

今子ども1人に1台タブレットというのがありますが、そのタブレットを使いこなせないご家庭もあります。接続ができないんですね。配られるのですが、家に帰って接続ができなくて、結局返却したり。そういうお家が少数ですがありますので、やはり情報とか、ちょっとした支援、お手伝いとか、そういったことも周りが気付くといいのかななんて思いました。それが子どもから大人までの幸せにつながっていくのかなと。やはりSOSを出せない親とか子どもをどういうふうに見つけていくのか。そ

んなところが大事だと思いました。

○藤原会長

学校をプラットフォームでやっていくという話があったのですが、末富委員がその辺、全国的にいろいろなことをご存じで、好事例としても前にお話をいただいていた記憶があるのですが、そのあたりも含めてご意見はありませんか。

○末富委員

学校をプラットフォームとしてというのは、別に私自身は先生が直接連絡するということだけで想定はしていませんでした。むしろ学校が発見した課題が外に出づらからこそ、それは自治体の側。特にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーですとか、足立区の場合こども支援センターげんき、みたいないろいろな自治体・機関がかかわって、どんな人がアプローチするのがいいのかということから含めて、学校や園で発見した課題をいかに子どもや家族自身を支えるために共有しながら、どうやって誰が動くかということを連携しつつ、動きにつなげていくというイメージでずっとやってきました。

ただ、こども大綱では、全くそのあたりの議論が踏まえられずに、非常に短期間に雑な議論が繰り返されてきた結果、皆さんのお手元にあるようなフワッとした、一体自治体は何をすればいいのだみたいな、100点満点の30点ぐらいのこども大綱になっていて。多分足立区の皆さんにとっても、これを見て何をすればいいんだみたいな状態だと思います。

私自身が今日のこの会議の趣旨ですが、基本理念を検討するためのキーワード出しということで申し上げますと、今の話を聞いていて思ったのが、一つはやはり住民参加の中で、子ども・若者参加という概念をきちんと組み立てていった方がいいなと思っています。今日いただいた資料でも実際に子どもたちや若者たちというのは非常にしっかりした意見を出してくれる子どもたちもいます。そうではない子どもたちにも

寄り添いながら、意見を聞いていくことが大事ですが。例えばですが、ユースカウンスルや小中学生の子ども議会を足立区でもされていますが、そうしたものをより実質的なものにしていく。それから足立区も自治基本条例をお作りですので、そこにも子ども・若者参画の規程を入れていながら、いかに全世代で一緒にいい足立区にしていくかというビジョンがこども計画には必要かなと考えました。

もう一つがこども計画って何かというと、自治体を作るんですね。その時にももちろんビジョン、こういう足立区になったらいいよねというのはすごく大事なのですが、ここにいらっしゃる特に行政や議会関係の委員の皆様方にお聞きしたいのが、では足立区は子ども・若者に対して、こういうミッションを果たしますと。あるいはこういう姿勢で向き合っていきますよということをしっかり最初に打ち立てた方がいいと思っています。子どもの人権・人格を尊重するという時に、大人の側に求められるのは、私たち大人は子ども・若者にこういうことを大切に接していく。あるいはこんなことは絶対にしない。例えば夢を無理強いする。2分の1成人式なんて非常に乱暴なやり方で、それで傷付く子どもたちがとても多いです。そんなに大して考えていない子どもたちに、無理矢理未来のビジョンを語らせるというのは、かなり残酷なことです。それでは子どもの意見表明や人格を尊重したとは言えないです。何かを無理強いしないとか、話を途中で遮ったりしないだとか。子どもだからって差別したりしないとか、1人の人間として向き合っていくよであったり。悩み事や課題があった時に、こんな足立区でいるのだとか。こういうふうには足立区は取り組んでいくというミッションの部分が、多分こども計画においては大事かなと思っています。

今いろいろな自治体のこども計画が走り始めているのですが、割とフワフワしたビジョンの部分が、こども大綱に引きずられて大きくなっているのですが、そんなことでは子どもや保護者は何一つ良くなりません。そうではなくて、

子どもや家族、あるいは地域全体のウェルビーイングのために、こんなミッションを掲げて私たちは頑張るのだみたいなところがあるといいなと思います。それは今まで子どもの貧困対策にかかわって、しかも藤原先生もかかわったEBPMをしっかりと回しながら、確実に成果を出してきた足立区の皆さんだからこそ、今まで大切にしてきたミッションを言葉にして、改めてこども計画の中に全ての子ども・若者、それから子育てしたい人や子育てを頑張っている人たちへのメッセージとして盛り込んでいただくことがすごく大事だと思いました。

○ぬかが委員

今のお話にもかかわってくるとは思いますが、私ずっと言いたいなと思ってたのが、先ほど中山さんからサードプレイスの選択肢があることが非常に大切だということがあって、私も本当にそうだと思っています。あるデータの中で、結局サードプレイスがあるかどうかによって、自己肯定感に差が出ると。要は居場所として学校と家庭だけとはまた違うのだというのを前に取り上げたことがあったんですね。そういう点でそれが大事だと思っていることと。それから私、実は基本計画の審議会の委員をやっているのですが、足立区の今作っている基本計画の中で、実はキーワードはやってみたいを応援するなんです。私それすごく大好きで大事だなと思っています。子どものやってみたいを応援できる、そういう足立区になりたいなって思ったんですね。なぜそう思ったのか、先ほど話が出たユースカウンスルですね。若者のまちサミットって、ユースカウンスルの日本版の取り組みの交流会があるんですね。その中でも例えば高校生とか中学生が、やってみたいを地域の人と一緒に、行政も後押しをしてくれて、目を輝かせてまちのことをやったりして。自分たちはこんなふうにかかわれるのだ、ということで語ってくれるんです。そういうことって足立区にはいろいろな下地があるから、困難もあるけど可能性もあるだろうと思っています。そういう

若い人たちの、また子どもたちのやってみたいを応援するというのが非常に大事だなと思います。

それは先ほどの検討素材で言うと、16ページのところでちょうど小中学生の中で、非常に禁止とか、上から言われるとかではなくて、自分たちの意見を聞いてほしい。自分たちのことを認めてほしいということにも、やってみたいを応援するというのはかかわってくるのではないかなと。それをかなえることにもなるのではないかと思いました。なぜ先ほど最初に私自己紹介の中で、わざわざ韓国のハジャセンターを紹介したかという、韓国は日本よりも学歴社会なのだけれども、ソウル市の中でまさにやりたいことをして生きようと。やりたいことが職業になるようにしようということで、結構大きな施設なのですが、アトリエとかブックカフェとかWebとか、映像とかポップ音楽とか、誰もが通えて、最初は困難を抱える人だと思っていたのだけれども、すごくやりたいを応援してくれるところだということで、私も1人知り合いがいたのですが、裕福な方もみんなそこに通い始めるんです。要はやりたいことを最後職業にまで応援してくれる。そういう仕組みがソウルの中にできてきて、それが大変人気だということで勉強してきたのですが、やはりそういうふうにやりたいをしっかりと応援できることが、いろいろなことでの解決の道になるのではないかと思いました。

ただ、そのハジャセンターというのは立派な施設なので、それが足立にできるかというそれは違うだろうと。ただ、そのエッセンスは活用できるのではないかと思っています。例えば一般の中高生が誰もが参加できる1日職業体験プロジェクトが何十もあるんです。1か月コースとか。やりたいを応援する何か月コースとか、そういうことでやりたいを応援する仕組みができています。そういうのに私は非常に感銘を受けました。そんなエッセンスが足立区で反映できたらいいなと思っています。

○藤原会長

公募委員の皆さんに確認したいのですが、やりたいことが分からないとか、決められないという若者も多分たくさんいるじゃないですか。そういった人たちに職業の曝露があればあるほど、それが見つかると思えると思いますか。

○田中委員

上から押し付けられるとどうしても反発してしまうというのはあるのかなと思っています。例えば高校とかで講演会もあったと思うのですが、優等生みたいな人が来ても、自分とは違うなど感じたことがありました。ただ、そういった場があることは重要で、そこに行って見つけられる人はいいと思うのですが、そうでない子にとっては、身近なところにそういった人がいるというのが一番なのかなと思っています。例えば地域のコミュニティの中で、年が近いお兄さんとかお姉さんとかで何かこういった職業をやっているみたいなことが分かると、より自分に近い、自分ごととして受け止めやすいのかなと思います。小野さんの中にもあったように、弁護士とかキラキラした職業ではなくて、自分が目指せるようなところのロールモデルがより自分に取っては一番刺さりやすいと思います。

○小野委員

先ほど委員長からありましたが、どういう人が伴走者になるべきかということと今の質問と合わせると、やはり現役世代だったり学生とかってやるのが多くて。子育ても忙しかったり。そこで一つキーワードになるかなと思ったのがシニア。引退したシニアたちに役割を与えることも一緒に進められるといいのではないかなと感じました。おじいちゃん・おばあちゃんとか例えば家庭を回ったりすることで、家庭の問題点の発見にもつながるのではないかと。予算も少なく行けるのではないかと思いました。

私も近所の板金屋のおっちゃんだったり、夢はそういうふうには本当に近所にいたおじちゃん・おばちゃんたち、中古の自転車のおっちゃん

んたちがなぜそれを生きがいにしてやっているのか。それを見ること。子どもの中にある憧れというのは、Y o u T u b e で見たりとか、学校で教わった職業しか分からないので、それしか憧れられないと思います。なので、そういった地域のおじちゃん・おばちゃんと会うのが大事だと思います。

○ぬかが委員

私のやりたいを応援するのは、夢とかじゃないんです。本当に何か自分がこんなことを言ってもいいのかな？こんなことをやりたいと思ってもいいのかな？とちょっと思ったことや、そういうものを応援していくというのが、ユースカウンスルでも、それからハジャセンターでも共通しているのかなと思います。つまり、そういうことを言うてはいけないのではないか、ではなくて、言ってもいい、思ってもいい、やってもいいと。こういう精神をもって基本計画でもそういうことなのかと。そうやって取り組んでいるのではないかと思っているのですが。今も区では実践しているとは思いますが。

○藤原会長

妊娠とか小さな子どもの子育て周りがあり話が出ていないので、そのあたりについて何かありますか。

○太田委員

不妊治療に関しては、自分自身も経験した中で思うのは、やはりどうしても孤独というか、相談先がなかなか見つからないところがあると思います。ピアカウンセリングをやっている自治体もありますが、当事者でしか分からないところ。打ち明けることで救われることですね。もっと言うと、無事生まれられない場合もあるというか、流産や死産のケースもあって、そういった方への支えというか、セーフティネットがない中で、出生率を上げていくという意味では、そういう方がいち早く立ち直って、次のお子さんを産み育てるところにチャレンジしていただ

けるのがいいとは思いますが、そこの救いの手がなかなか届いていない現状があるとは一つ感じているところです。

○田中委員

私の子どもが2歳なのですが、少し感じているのは、公園は多いのですが夏休みは外が暑すぎて遊びに行けないというのが実感としてあって、本当に遊ぶ場所が少ないなと感じています。例えば足立区だと千住ポルタにあるピュアハートとか、そういったところって1日いると家族3人で5,000円ぐらい取られるので、なかなか高額で毎日に行けないなというところもあるので、こうした遊ぶ場所をもっと整備していただけるとありがたいなと思っています。

○中山委員

小学生と接していて、夏休み、毎日熱中症アラートが出ていて、全く外に行けない。学童に行っている子も行けないし、そうではない子も全く行けない状況で、みんな部屋の中で過ごしていて、これは子どもたちから聞く話なのですが、毎日Y o u T u b e 漬け、ゲーム漬けになっていて、その生活を1か月半やった後に学校なんてとても行く気になれないと思うんです。冷房の効いた中で1人で自分の好きなことをした中で、また1日5時間も勝手に決められたところに置かれるということで、学校に対するモチベーションがすごく落ちてしまったり。友達と遊ぶこともあまりないので、そこが学校に行きたいという気持ちがなくなったり。L I N E でどうしてもやりとりをすることが多いので、実際に我々がかかわっている子も、L I N E でいじめられてしまって、そこから不登校になった子がいたりして。リアルに子どもたちがかかわれる場所、遊べる場所が非常に今少なくなっていますし、これは気温の問題もすごくあったりするので、整備しないとどうにもならない問題だなというのは一つあると思います。

○菊地委員

今までの話とは論点がズれるのですが、子育て・出産ということで、私は4人きょうだいで、今シングルマザーなのですが、私の友達を見た時に、あまりきょうだいがいる子がなくて、一人っ子が多いということで、私たちの年齢で別に何で一人っ子なのって聞きはしませんが、私の母から聞いた話では、やはり1世帯に自治体から何かもらうものというのは、大体そういう支援であったりというのは、特に1世帯に対してのものだから、それがもし子どもが増えたら、1世帯に対してもらえるものでは不十分みたいな話をしている。私の4人きょうだいも、私が何とか頑張っているから成り立っているのだろうと思うし、周りを見ても1世帯だったら1人の子に全力でお金を掛けたいし、時間も掛けたいというふうに言っている人が多いと聞いたので、そういうくくり方も何か原因があるのかなと思いました。

○山崎委員

資料1の9ページ。貧困対策、子ども・若者育成支援というのは、比較的矢印が太くなっているのに対して、少子化対策が細めになっているところ、資料を拝見していてすごく気になっていてですね。ここまで盛り込んで政策を立てていくなれば、20代は転入が多いのに、子育て世代がどんどん逃げていくというか、離れてしまうというところ。ここをしっかりとサポートしていかないといけないのかなと私は思ったんですね。私自身は一旦2年ほど賃貸で別の区に移りましたが、足立区に戻ってきました。アンケート結果を見ますと、親戚・知人がいる、実家が足立区にある、というところが結構大きいのと、生まれ育った場所だからという理由が少なくはあるけれども、1位に挙げている人もそこそこいるみたいな状況があつて。やはり実家があることも含めてですが、ずっと住みたいまちであることって大事なのかなと思うんですね。

実際にたまたま今日ですが、9月の第2日曜日、御神輿どう？っていうのが小学校の友達か

らメールで入って、そのメールをくれた子は足立区ではないのですが、そういうつながりって残っていくんですよ。やっぱりずっと足立区に何かしら縁を持ちたいと思って子育て世代も定住してくれるといいかなというのがあつて。

あとは資料を読んでちょっと気になったのが、やはり都内なので不動産の価格の問題で、郊外に出ていく方がいるということでしたが、逆にもう少し足立区より地価の高いところを選ぼうとしている人を足立区に取り込むと考えるのもいいのかなと思うんですね。そのためには、公園も多いですし、子育て政策もかなり手厚くやっていますので、もうちょっと魅力をアピールしたいと思うんですね。

あとは交通の便ですが、私が南花畑にいた時は、つくばエクスプレスは通っていませんでしたので、ものすごく移動が大変だったんですね。バスで綾瀬に出る、竹の塚に出るっていう状況。江北に移った時も、舎人ライナーがなかったんですよ。バスで日暮里まで出て行ってという状況の中で、交通の便もすごく良くなってきたというすごくメリットもあつて。外の方がもっと足立区に住んでみたいと思う人が増えるような、もっと住みたいまちにしていくということも大事だと思います。

ギャラクシティなんてすごく区外の友達も、うちの子どもも一緒に行きたいと言って行くのですが、西新井の東口・西口が全然違うんですよ。西口は公園もあります。アリオもあります。フードコートもあります。食べに行けますという状況なのですが、東口しか知らない。ギャラクシティに行くとあとは住宅街で、お昼を食べさせるところがないんです。そうなってくると、区外から来た人でギャラクシティに行つて、そのままどこかに戻ってしまった時に、住みたいって思うかなというところがやっぱり住民目線では気になっていて。エスカレーターもないですからね。トスカの中に入れていいですが、それは住民でないとは分からないですから。そういったところでまちづくりも含めて、かなり長期的な話になると思うのですが、魅力的な

まちづくりをしていくというところで、子育て世帯を増やしていく。小さいお子さんが増えていく。小さいお子さんと経済支援というところが一番のニーズになってくると思うのですが、全部つなげて考えていけないといけないと思いました。

○小野委員

私は大阪の出身で、多分この中で足立区歴が一番短いと思います。でも、東京には八つの区に住んだことがあります。そこで思ったのが、足立区が子育て世代に取り組まないといけない理由って何なのでしょう。別に良くないですか？と言いたいです。というのも、都全体で区の役割というのはあると思うんです。なので、わざわざ足立区が今現状がある中で、不動産価格が上がっているなら、そういう世帯に向けた支援をする。矯正が必要な部分も少々あるかもしれませんが、足立区だけが良い場所にならなくてもいいのではないかと。流入が多い東京で足立区にずっと住んでいる方がいらっしゃることもないと思うので、そういう意見がありますというのが申し上げたいことです。

あと私は子どもを持ちたくなくて、今児童養護施設の支援をしています。本当に子どもを産みたくないということで離婚を経験しているぐらい子どもを持ちたくないと思っています。なので、子どもを持つというのは、今の時代選択肢だと思っている部分もあって。先ほど4人子どもがいたら、1人よりも割合が少ないってあるのですが、独身世代なんて何の支援も得られませんから。そう考えるとやっぱり不公平感が募ります。そういう視点はなかなか申し上げにくい部分ではあるのですが、意見を申し上げました。

○藤原会長

良い少子化対策をしても、他の自治体から流入しているだけで、本質的な少子化対策になっていなかったりするという話もありますので、そこも含めたまちづくりとしての、ずっと住み

たいと思う足立というところなのだろうなと思いました。最後に川上委員、全体を通してありましたらご意見をいただけますか。

○川上委員

少子化のことも言っていましたが、私は自治会長もやっているのですが、今年の小学1年生の入学者は1桁です。1,000世帯ある中で8人。小学校の1クラスで36人になると2クラスになるんですね。それで、35人しかいないから1クラス。では運動会はどうするのか。紅組・白組って同じクラスで分けて競うようになるんですね。だから、その上の学年、2年生もそうなんです。20年も前に廃校になるのではないかという噂も出ていたのですが、未だになんとかかかんとかもっています。

先ほど長谷川副区長がおっしゃっていましたが、足立区で生まれて、足立区であの世に行くということなのですが、昔学校が私、国立競技場の近所の高校に行っていたのですが、あなたどこから来ているの？って聞かれて、足立区って言いにくかったですね。橋向こうって言われるんですね。古い人は分かっていると思うのですが、橋向こうと橋こっち。千住は近所ですよというぐらいなので、今は足立区も大学が6校出てきているので、お子さんたちも若い人たちが千住の街に行っても結構活気が出ていますよね。

それと民生委員という立場で言うと、生活保護に掛っている方はお子さんはいない大人です。民生委員の仕事はどちらかというと中村さんが以前民生委員の部長だったのですが、その時に我々民生委員はお年寄りのことは結構いろいろと手厚くやっていたのですが、そこでもって子どものことはすごく手薄になっていたということで、足掛け8年目になるのですが、子ども食堂を始めて。そこはダイアナさんが来たあけぼの学園で、その理事長先生とタイアップして、週1回水曜日に子ども食堂を開いているんです。それでその他に去年から始めたのですが、夏休みの7月と8月に各1回ずつ食堂をやろうと。

去年は60食ばかり作ったら、30分足らずで完売というかなくなってしまった。じゃあ今年はどうしようかということなのですが、全体の予算を考えると、小さいお子さんにも一つ大人分をあげていたと。そうすると残るわけですが、もったいないなと思ってもみんな廃棄物になる。では今年はどうしようかということで、その60食分をもうちょっと小さくして100食作りしました。公園の隣の住区センターでやるのですが、そうしたらこの暑さで、40人足らずしか来なくて、60食が余ってしまうんです。それはしょうがないから各自で2食、3食持っていくことになりました。そこでもって春見先生という方が毎週水曜日やっているのですが、学習塾も一緒にやってくれているんです。今まで不登校の子も結構いたらしいのですが、そこに来て、高校に行くような学力も付いてきたという話なので、継続は力なりでもないですが、これから少しずつ街のために、地域のために力を尽くせばいいと思っています。

子どもの貧困ということは大人の貧困ではないかと私は思っているのですが、先ほど山崎さんが言っていたように、大人のことをまず考えてやれば、子どもは大人の背中を見て育っていきますので、子どもの貧困プラス、大人の改善という施策を区議会議員の先生方にもお願いしたいと思っています。

○藤原会長

ありがとうございます。これまでいただいた意見を元に、事務局で整理をしていただいて、次回の審議会では事務局案を元に皆様で基本理念について検討していきたいと思っております。私の進行はここまでとして、事務局にお返しします。

8. 事務連絡

○事務局

本日はありがとうございました。1回目から多くのご意見をいただきまして、ありがとうございます。これからどのように整理していくか

は悩ましい部分ですが、より良い計画を作って取り組んでいきたいと考えております。事務連絡ですが、委員の皆様事前に事前にお渡ししている報酬関係の請求書は、お帰りの際に事務局職員にご提出をお願いします。次回の審議会は、11月21日木曜日。時間と場所は今回と同様、18時半からこちらの庁議室で開催します。開催直前になりましたら、改めて書面で通知をさせていただきますので、ご確認をよろしくお願いいたします。

それでは本日の審議会はこちらで終了となります。お忘れ物のないように、またお車でお越しの方には駐車券をお配りしています。事務局職員にお声掛けください。本日は大変ありがとうございました。